



遠あがりて曲々傾きなり幸ふるはふりよく曲々目ふ立ちり
 然れども是と何ともおりの妻子輩らやの鹵莽と愁ひて家居
 と修補し〜あ〜〜〜諫勧をば芝山うあづき頓て大いある紙
 ととり〜〜〜家の圖と仔細き〜り貯蓋する〜りの圓金を
 數十ひり把り〜〜かの圖會の上ふおれ玄関ふ何両居室ふ何程
 客次ふらまわど納處ふいら〜〜茶室浴室せつらんふい〜
 ぼ〜〜〜黄金と配當〜〜双おれ少時これと窺〜〜頓て
 大いふ驚さ〜〜光景ふ〜〜火事ありいと近〜逃〜
 と云あがり〜双〜圓金と繪圖の紙ふ〜〜懐裡ふ〜
 て書紙のうちふ赴り〜〜襦ろ〜〜て臥ふ〜
 世人の事と妻子們
 天恩とあ〜

あまると看て大いふかざらるる亦も感づ其後ろつふ家の修葺を
めび這事りて滑稽ありといへども世間の驕奢りの爲ふ
よれいましめふぞ有るる 予が兄這人と能知る

○祥 藥 和 尚

祥藥子の阿笏板野郡木津野といへる處の莊官岩淺官次
といふ者の子あり十六歳少く出家し同處撫養軒家
正興菴の祥海子普海比丘の弟子となりひとひら学文を好
み成長ゆるふあつがひ学才ありつも高く詩と賦と文とつほ
事衆人ふ勝るる幼稚といへより物ふかづつらぬ癖あり祥海子
歿後師のあとを繼て正興菴ふ持住のべれと祥藥りがはつまで

是とつゞ依てせんといへる其次第を繼て照始比丘と号
以後まゝ其照如此丘卒して外に繼べき人あり止夏あつて
祥藥五十歳のといへ正興菴ふ持住はされども我終つて比丘
ふあつゞ僅ふ十年ばつりつゝ忽ち其弟子ふ譲りて同處
黒崎長部谷といへる處に隱居し菴と幻夢菴とあつゞ祥藥
子に來博識して在りまゝ近れつゝ勿論あつゞ御城下
とく島中でも弟子かやくあり然る菴の修理その外衣眼米など
ゆるが弟子中よりまづあつゞ事なり長部谷より徳島まで
行程四里ありかゝる遠はとつゞと朝の間ふまゝりてとく島の
弟子の家ふ到り昨宵狸のこがや飯櫃とあけと残らぬ食

尽しつゝ今朝飯くが懶さふあやまで呼ぶらふありの茶
 飯とらるやいふ人といふ弟子大いふさうく撫養ふも弟子お
 くあり亦本寺正興菴へゆれても然るまゝを朝弁一統ふ
 せんも遠く爰まで來しつゝ我とて無二の弟子と思ひ
 むふが故あるべしと殊ふよろこび待管多りかゝる行状の和尚か
 らば平生大うごゝ菴中ふあゝび閑がふせに開放しつゝあ
 出のりくあ多時々遍路の乞食なごふ衣服米穀と偷る事計し
 其更毎ふ弟子中より是とほくの事あれは時々祥葉子諫て
 つゝこのち他ふ出あふもこれかあゝび堅く閑ていごもへべ然る
 てハ斯の如く衣服米穀等と盜濁更かわり侍へばもくも心

と用ひる人といふが祥葉答ていふ金銀ちゆやよりなう唯
 いふ米麥のさあり他們それと盜らうとも海川へさる小
 づゝび衣服ち寒とあつた米穀の餓とのやゝ為み盜むるめさ
 ば天下の貧民とさるふ同く敢てさむふ足びとて猶此のちも
 とさるせび開放おれて出ありく然ども夜ふつゝつゝ編路を
 見あや菴中ふ入てふ或は火かど焚事もあつらう若
 過失も計がとつと近記わたりは家々より時々み見廻りし和
 尚菴ふ在らうとれち堅くとぎとて錢をかろとて置ふら
 夜更て祥葉かへり來て菴ふ錢のありらるを看て是と開を
 めれらうかもし近記わたりは農家ある薪小家のらちふ入て



う一天明て這家より朝科を以て食し其終すの外
 へ出去る何ふれ一向万般ふかづれば唯書とよむと
 漫行のやう他事をし読する書は袂に括り
 て自親せぬひあり事あり徳島免許町岡屋十兵衛
 といへる酒造家あり祥葉とて行く家あり一時十月
 のち夕暮ふ這家に行くらば十兵衛よ海を以て奥室へ請へ
 りて科と安排しめてあり今宵も我家ふとあり給へ
 と云くは和尚も大いふ懼びて岡屋一宿しとるる夜
 朝ふり祥葉子十兵衛ふりやう徳島を蚊がとるる
 宜きと存かりしが長部谷も今も蚊帳とほりて寐

石巻 方角

白鷺

此中... 年... 和... 虫... 食...

夏かりといふも... 十兵衛... 蚊の... 奇... 不審... 居... 祥葉和尚... 黒奇の菴... 中へ行て看ふ... 蚊帳と... 蚊帳と外... ひくれば蚊... 蚊帳つ... 蚊帳の...

遊... 及...

一... 物... 天... 今... 和... 佐... 山... 碑... 銘... 看... 祥... 葉... 文... 政... 六... 壬... 未... 冬... 十... 月... 十... 九... 日... 卒... 正... 興... 菴... 境... 内... 墓... 碑... の... 彫... 著... 一...

萩原榮輔

又... 物... 言... 白... 虫... 之... 記... 末... の... 時... 一... 個... の... 養...

存命居... 蚊帳外... 祥葉蚊... 和尚も... 尚實... 一... 崎... 人... 物... 語... 和... 佐... 山... 碑... 銘... 看... 祥... 葉... 文... 政... 六... 壬... 未... 冬... 十... 月... 十... 九... 日... 卒... 正... 興... 菴... 境... 内... 墓... 碑... の... 彫... 著... 一... 萩原榮輔... 住... 所... 今... 性... 落... 一... 年... 春... 日... 那... 里... 漫... 遊... 末... の... 時... 一... 個... の... 養...

萩原の
様



車くるまのりて亦一人ひとりの若わかきと見みる車くるまの繩あひと肩かたふかけて曳ひ居ゐる萩原はぎはらと看みて蹇あやふ問とて曰いく今いま你あんたが車くるまと曳ひくる者ものか、と云いふハ奈い何なありものぞ、覺あ覚あさしてあまの賤か老のが二ふ子こふと云いふ、今いま你あんたがのりくる車くるまと曳ひく一ひと子こと云いふ時ときのあひど我われふか、與あよや云いふ、實あ大おいふおどろき這こ車くるまと曳ひりて何なにふう、と云いふ、やと云いふ萩原はぎはらが曰いく、且かつ當日このひ諸もろ方かたのりて足あし大おいふは、然しかども亦また今いまより隅すみ田で川が花はな見みお行ゆく、と云いふ、おふつれ、付つけ、車くるまと曳ひりて乗のりてゆ、と云いふ、思おもいありと云いふ、覺あ覺あすと聞きて大おいふ、忙あいさ、と云いふ、もの、が乗のり、汚けら、と云いふ、車くるまのりて、大おいふ、人ひとと云いふ、れ、乗のり、料りょう、と云いふ、成なべ、と云いふ、別べつ、と云いふ、轎こ房ぶ、と云いふ、分ぶん、と云いふ、付つ、と云いふ、大お、と云いふ、轎こ、と云いふ、

ふりて行せまふべしといふ萩原聞ていかく大轎あてを
看せし亦らりかんと思ふも足はくもさる馬子のうても不
弁利あり左右あんど乗る車と我ふかひべし酒代は何
かどあくも把にべれありと懐裡より錢ととりしつて壁
ふあく強て車より扯かりし自親その車ふのうて若れ
乞兒小繩ととりて曳出させ竟小鴨田川ふりりりり見と
看往來の人々笑ひぬめぬ魚とりの萩原と夕ぐれす
花と看ありに黄昏のころ馬道ふたふたの壁にある寺
の門前ふ蒔ひれうづうて臥居る萩原車とあかへ返
若る乞兒ふもあやけれ錢ととりて天晩て家ふかへるとと

予が兄這人として知て

○唐齋

江戸麻布雜式といへる處ふ氏と忘る唐齋といへる儒者ありし
書と能くしりも博覧の人ありよの老儒とありて時人にて正月
年始の礼客門ふ來りしつゝびも同く答礼とありし事と懶
かひ何れとて礼者の來ざるやうふ為べしやあひ門の戸と
しし簾とさげそれふ忌中といへる紙札とありおれたる
あつし彼の門とて軒ふさぐれとけしひし紙ふ忌中と書て
たりや夏ありしまじ江ふ出まらざる遠境の人のあふあつし
是と看て大りふおられ誰人が古きひん太あつる得ばと云て頭
唐齋が家ふ來り訪るる唐齋友人と酒の居て礼者のい

くりも来るがうらうらふ斯くも置ありと語らると唐
齋はひふ澤菴漬の大根とこのと一尙食たるふど年々おかく
買入て漬おれらるが這桶の押石ととりく人ふ盗く夏あり
唐齋是ふさうしとせよと這石ふ残らば戒名を彫つけておれらる
が其のち更ふ盗く夏なり此人つゆふ雀と愛く朝飯代食
とりて後まゝ一椀の飯とゆりて庭上ふこもと時ととりて
手と拍らればもあらずも數百の雀ひらり來り彼飯ととひ
夏あり少時ありて赤手ともりくと鳴くも彼雀つとも
あく飛さりて一羽も居ばありふらるる昏も猶斯のてく都て日
ふ三度つ食とゆりくあり予唐齋が事ふらぬかば

麻布仙臺坂桃樹院とく寺ふ久く在りうよ一時這寺を
問われども持僧數代ありと委く志も然ども書らる些く
残るる東海道程谷宿永田の宝林寺中東輝菴といへる處ふ
四五年もありて爰ふく没くうらうあり

○神田菴小知

小知ち原米賈人ふして東武神田ふ住し俗稱伊勢屋八兵
衛とよびて性豪放うと俳諧と好み三井親和の門人
書とよく俗様と馬場流産神田明神の大幟とゆりて其
筆跡今猶のこれと年老て家産ともいへ俳諧とめて業
と神田菴と号し自ら一固の見識ありて世間の人と睥睨



百家廿

一世と遊び人々々々、児童心ふありて世とくくく、生涯理
 屈と離れ々々々々、のありとて、見戯の手、旋ものささのめ々々
 つく大むりくと土人形むど、薰笛風車のくぐい都て何ふと
 び持あまびの具とせり、買集て一室のくくく、せれやで双べ
 置具とめて、遊びくくく、のくく、暮くくく、人も具とま
 て万般の玩具とかひて、土産くくく、齋くく、来り小知くく、を
 得て只管ふ、嬉びりりか、あられの家くく、く、貧てくく、
 物ふ困く、り一日社中一公子のめ、行く、一歩金ひく、
 と貫ひく、路上との半の玩具とく、く、く、のく、飯て後米新
 あく、此く未々く、く、く、文化三丙寅く、高繩く、浅草く、

三里りあり焼亡の災かゝるなり 這くは小知が菴もとも延
燎ふかろし一が竟ふその去方とあらば社中の人々大いよど
ゆき老人の更あまふ若過失やありんか十分あらと勞
め八方ふ手と分ちて找尋せらるる下次の日護持院原の
松のあげりたる下ふ郷黨の災ふあひしりの大勢集り居る
中ふ小知祇と芝の上ふしれ其上ふ座て百韻の巻の点して居
るしとぞ其道ふ志とほとめ造次顛沛とふかいてほる車
真節あると胸中の哀落と稱しつべし後九十二歳して家
没は一家の風流あつてべし擦谷氏の話なり

○菅蒲革馬肝

馬肝も麻布白銀も住し佛詣と業も常ふ菅蒲革は
模様とよのゝ衣服も上下とも皆菅蒲革色ふとめ三角の
ゆりとりとちりし家の壁あど緑革のゆりふとり物も器財
もかやくも萌黄ゆらふあし三角も制しつる器とゆり三度
の食更けし握り飯と三角も制させ常上是と食く最滑
替あり一時社中の人々何ぞ宗匠の嬉ぶものを贈へしと互ふ
ゆい合せ一人も菅蒲革の夾帯とおく一人の三角お火鉢を
焼せしかりるる今一人も蓋擦とおかりるる馬肝これと殊
のやう懽喜しとぞ

○外山成山